



慶應義塾大学ビジネス・スクール

介護保険事業所パッション

— 震災時のマネジメント —

(C)

翌朝

一行は避難所で眠れぬ夜を過ごした。一夜明けた12日の朝、前日は非番だった者や、自宅が被災した者^[1]など、パッションのスタッフのほぼ全員が、自主的に避難所に集まってきた。まるで家族同士のように、スタッフも利用者も抱き合って再会を喜びあった。シフトを組み直し、利用者44名に対してスタッフ26名を配置し、利用者に対して手厚い対応ができる体制となった。

加えて、思いがけない嬉しい差し入れが届いた。昨夜迎えにきたデイサービスの利用者の家族から、毛布や肌掛けなど50枚と、暖かいおにぎり110個の差し入れが届いたのだ。差し入れをしてくれた利用者の家族は、地元でホテルも経営している地主であった。これだけの毛布があれば、44名の利用者全員に行きわたる上、筋肉が硬縮している利用者のクッションとしても使える。おにぎりは、前日から空腹だったスタッフ達にとっても嬉しい差し入れだった。

避難所におにぎりの香りが広がりだすと、周囲から羨望の眼差しが注がれた。中には市の配給と勘違いして、覗きに来る者もいた。

一方、事情はよく分からないが、倒壊した老人保健施設の介護職員の姿はその場には5-6名しか見

^[1] 職員の殆どは自宅が地震による一部損壊や津波による浸水被害を受け、後に罹災証明を受けた。

本ケースは、高木晴夫の指導の下、慶應義塾大学 HSR（ヘルスサービス研究会）の伴英美子、秋山美紀、渡邊大輔、中島民恵子、古城隆雄が公開資料および複数の被災施設での取材に基づき作成したものである。教育目的に沿って複数の施設の経験を合成しており、実在する施設の経験とは異なる部分がある。クラス討議での使用を目的としたものであり、特定の経営管理上の適切あるいは不適切を例示しようとするものではない

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクールまで（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp）。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。ケースの購入は <http://www.bookpark.ne.jp/kbs/> から。

Copyright © 伴英美子、秋山美紀、渡邊大輔、中島民恵子、古城隆雄（2018年6月作成）

えなかった。寝たきりの高齢者達はパット交換も体位交換もないままに硬い畳に寝かせていた。全く動かない者もいた。

こちらを凝視している老人達の姿は痛々しく、河村らパッションのスタッフの心は揺れていた。

5

設問 5：もしあなたが河村の立場だったら、毛布やおにぎりを別法人の入居者達に分け与えますか。その判断基準は何ですか。

設問 6：今回の議論を踏まえ、あなたの組織では震災にどのように備えようと思いましたか。

10 注記：本ケースには、東日本大震災発災時の描写があります。本ケースを用いたケース・メソッド教育への参加は自由意思によるものであり、不参加あるいは途中退席による不利益はありません。不参加の場合はその旨を主催者にお伝えください。

15

20

25

30

不 許 複 製

慶應義塾大学ビジネス・スクール
